

大岡昇平『武蔵野夫人』の舞台に関する地理学的考察

—「はけ」の家の位置をめぐって—

大野 勲¹⁾・内田順文²⁾

1) 日本地理教育学会会員 2) 本学地理・環境専攻 教授

I はじめに

本稿は大岡昇平の小説『武蔵野夫人』の舞台となった場所及び主人公・秋山（旧姓宮地）道子が暮らしていた「はけ」の家と、そのモデルとなった場所について論じるものである。『武蔵野夫人』は昭和25（1950）年1月号から9月号まで文芸雑誌「群像」に連載され、同年11月に講談社より単行本として刊行された小説で、『俘虜記』や『レイテ戦記』と並ぶ作者の代表作であり、戦後間もない昭和23年初夏から晩秋にかけての東京郊外（武蔵野）を舞台として、フランス心理小説の手法を日本の文学風土で試みた作品であるとされる（東京新聞文化部編、1991、長谷川編、1991）。

たとえば宇波（1994）が「このように「地形」を前提とした舞台の設定があり、そこへ人物を登場させるのが大岡昇平の方法であるように思われる。」（p.3）と指摘するように、大岡の文学作品は作中の地形や地理に関して正確な描写を行うことが特徴であり、この点に着目して、地理学的な視点から大岡の作品を扱った文献も少なくない。

前田愛は、文学作品をその舞台となった場所との関連から読み解こうとした先駆的な研究で知られるが、その実践編ともいえる前田（1986、ただし初出は1983年）において、堀辰雄『美しい村』や織田作之助『夫婦善哉』などと並んで、大岡昇平の『武蔵野夫人』に一章を割り、論考している。これとほぼ同時期に、寺本（1985）は、大岡の自叙伝的作品である『幼年』と『少年』をテキストとして、彼が幼少期を過

ごした渋谷周辺の原風景が、地理的な環境を描写する優れた観察力や洞察力を形成したことを明らかにした。また、東京とその近傍を舞台にした文学作品を複数取り上げ、そこに描かれている地理空間を読み説くことを試みた杉浦（1992）は、「武蔵野幻景—武蔵野台地とは？」の一章を設け、その中で『武蔵野夫人』を題材として主として自然環境の面から作品の解釈を行っている。蟹澤（2004）は、大岡昇平の作品に地形や地質に関する記述が随所に現れ、作品の背景となっていることを、『俘虜記』『レイテ戦記』とともに『武蔵野夫人』を取り上げて論じ、古田（2005）は、『武蔵野夫人』の作中重要な場面の舞台となる4ヶ所の場所の意味を、水系との関連から説明しようとして、それぞれの舞台の地理学的（地形学的）特徴を手がかりとして作品を解説した。また、椿（2005）は、身近な地域学習の題材として文化環境としての「ハケ」に注目し、小学校の地域学習用の副読本に記載された「ハケ」の記述を分析する中で『武蔵野夫人』にも言及している。

これらの論考の多くが小説の舞台となる武蔵野台地、もっと具体的には「はけ」という地形に注目して論述されていることは、それだけこの作品にとって舞台として設定された「はけ」が重要な意味を担っていることをうかがわせる。しかしながら『武蔵野夫人』の舞台が東京西郊外の現小金井市周辺であることは自明で、周知のことでもあるのだが、さらに細かな舞台の特定ということになると、必ずしも明確にされているわけではない。地理学的な研究以上に、『武蔵野夫人』の文学的評論はさらに多い

が、特に小説の舞台となった場所や「はげ」の家のモデルに関して、詳細に考察している文献はほとんどないと言ってよい。

一般には、大岡が昭和23(1948)年に数か月間寄寓した知人の富永次郎宅、小金井町399番地(現小金井市中町1丁目13番地)が、小説の主人公・秋山(旧姓宮地)道子が住む家のモデルであるとされることが多いようだ。

たとえば、前田(1986)は、『武蔵野夫人』では、武蔵小金井と国分寺の中間に位置づけられている「はげ」の家は、じっさいには大岡昇平が昭和二十三年二月から数か月ほど寄寓したことがある富永次郎の家がモデルで、その場所は小金井市中町一丁目に当る。」(p.223)と明言しているし、また、杉浦(1992)も、「小説のモデルとなった「はげ」の家は小金井神社の東方に位置し、…」(p.19)と述べている。ほかにも、佐々木(1993)には「道子の家のモデルとなった家は、作者が一時寄寓していたことのある故富永次郎宅だということは、富永自身の書いた『武蔵野夫人』の舞台はボクの家」という一文から明らかですが、…」(p.73)とあり、大井田(2004)にも「道子の家もむろんそのとき滞在していた富永家をモデルにしている。その家自体は建て替えられ、いまはもうないが、富永家は現在も同様の位置にあって、「はげ」の道に面して立つ門が、唯一当時を偲ばせている。」という記述がある。2004年に江戸東京たても園で開催された企画展『武蔵野文学散歩展』においても、富永次郎旧宅の復元模型の展示とともに、富永家をくはげ>の家のモデルとしてはっきりと紹介しており、「はげ」の家＝旧富永次郎邸というのは、半ば定説となっているかのようである。

おそらくこれらの記述は、大岡の級友であり美術評論家の富永次郎が「作者が宮地老人の家として設定したのは実をいうと父の代以来三十余年ぼくの住んでいる家なのだ。また、道子の従兄に当る大野と妻の富子の住む家は、「はげ

の家」から栗林をへだてて地続きになるらしいが、これは全然作者の空想である。」(富永, 1958, p.42)と明言していることに依拠していると思われるが、明確な検証が行われたわけではないようだ。

一方、同じはげの道沿いにある中村研一画伯の邸宅(現在の中村美術館)を小説の舞台としたとする記述もあり、小金井市(1979)には、「小説の巻頭に載った簡単な地図によると、武蔵小金井駅と国分寺駅の間が「はげ」ということになっており、そこから滄浪泉園が舞台だと思っている人が多いが、実はそうではない。ヒロインの宮地道子の家は中村家、「はげ」の荻野長作が渡辺家、そして大野の家が富永家であり、駅で言えば武蔵小金井から武蔵境寄りに位置している(いずれも中町一丁目。)」と書かれているし、中村美術館敷地内にある説明板にも、「この場所は大岡昇平の小説『武蔵野夫人』のモデルになった地」と書かれているが、作中の誰の家のモデルかまでは記されていない。この件について、美術館に問い合わせたが詳細は分からなかった。

また、数は少ないが、小説の舞台となったJR国分寺駅と武蔵小金井駅の中間に位置する滄浪泉園をモデルとするという記述も散見される。このように「はげ」の家のモデルは、これまで同じ小金井市中町1丁目にある、旧富永邸と旧中村邸(中村美術館)の2説(滄浪泉園説も入れると3説)あり、必ずしも特定されていないようである。

そこで本稿では、小説『武蔵野夫人』の舞台となった場所(とくに作品の中心となる「はげ」の家＝道子の家)を特定し、巷間言われているように実在するモデルがあったのかどうか、について確認することを目的とする。

方法として、「はげ」の家と、荻野長作、大野英治の家の状況、地形、周囲の景観等に関する作中の記述をもとに、現在の景観および小説が書かれた当時の地形図と比較しながら、現地

を歩いて条件が一致する場所を探した。使用した地形図は、昭和17年～19年に大日本帝国陸地測量部と都市計画東京地方委員会によって作成された東京西郊の3000分の1地形図(清水靖夫編, 2004)である。

なお、今回の分析には、新潮文庫版の大岡昇平『武蔵野夫人』(1953年初版)をテキストとして用いた。以下、本稿で引用する『武蔵野夫人』の文章およびページ表記は、このテキストに基づくものである。

II 小説の舞台となった場所の特定

『武蔵野夫人』の主要な舞台となる場所には、「はけ」の家＝道子の家、荻野長作の家、大野英治の家の3軒の家が存在する。この章では以下の手順で検討を行い、小説の舞台となった場所、すなわち3軒の家が存在した場所を明らかにする。(1) 3軒の家に関する地理的な記述内容から3軒の家の位置を推定しその地図化を図る。(2) その地図と他の地理的な記述内容との整合性を検討する。(3) 整合性検討の結果、矛盾が生じる場合は矛盾を解消する3軒の家の位置を考察する。

まず、つぎに示す記述は、「道子の家」から「大野の家」に行くまでの周囲の景観を描写したものである。作者は右手に耕作地その先に野川を見ており、したがって左手は「はけ」の斜面であるから、作者は東方向(新宿方面)を向いて前方の情景を説明していることになる。そして1行目の記述から、「荻野長作の家」が手前にあり、「大野の家」がその先にあることが分かる。また、ここでいう「道」とは「はけ」の道(下道)を指すことから、両家とも「はけ」の下道沿いにあることも分かる。

道は「はけ」の長作の家の前で少し高まり、大野の家の地壇の石垣の下まで、直線でゆるやかにさがって行くが、そこから斜面を蔽う

雑木林に沿って蛇り始める。

右手は耕作地で^{おかほ}陸稲や^{そさい}野菜を植えた黒土が拡がった先は一段低まり、野川の両側に狭い水田が発達する。(p.58-59)

また、次の二つの記述によって、「道子の家」の敷地が「はけ」の下道と上道に跨っていることから「はけ」の下道沿いにあること、また「道子の家」と「大野の家」との距離が1丁(約109m)であることが分かり、3軒の家は「はけ」の下道沿いに西から東に向かって「道子の家」、「荻野長作の家」、「大野の家」の順に存在することになる。

「はけ」の下道から、斜面の上を通る道に跨がる宮地老人の上地は、老人の奇妙なペダンチズムによって、他の家のように門を駅に近い上道に持っていなかった。(p.36)

秋山はそればかりか、夕方など時々散歩と称して斜面の下の道を一丁ばかり歩き、大野の家へ寄って時間を過ごして来ることがあった。(p.24)

そして、その位置は次の記述から武蔵小金井駅から徒歩15分のところにあることも分かる。

三十年前湧水を含む窪地一帯の約千坪の地所は、ほとんどただのような値段で東京の官吏宮地信三郎の手に移った。(中略)。というのは土地を手離して五年経つと、ここから徒歩15分のところに小金井駅ができ、地価が三倍になったからである。(p.11)

しかし、これらの記述だけでは駅より国分寺側にあるのか東小金井側にあるのかは分からない。第I章で述べたように、従来、道子の家(「はけ」の家)のモデルとなった家は、富永邸あるいは中村邸なのではないかと言われてお

り、その場所は共に武蔵小金井駅と東小金井駅の間にあることから、とりあえず3軒の家は東小金井側にあると仮定しておく。すると、3軒の位置関係は第1図のようになる。

つまり、武蔵小金井駅に近い順に、道子の家(宮地老人の家)、荻野長作の家、大野の家があり、しかも3軒とも「はけ」の道沿いにある。そして、道子の家と大野の家の距離は1丁(約109m)ということになる。

この仮説に従うと、以下のような本文中の表現に矛盾は生じない。

宮地老人の物置や樹の買い主は赤の他人ではなかった。すなわち一年前から「はけ」の長作の家の向こう栗林を隔てた地続きに移って来ていた、甥の大野英治に売ったのである。(p.19)

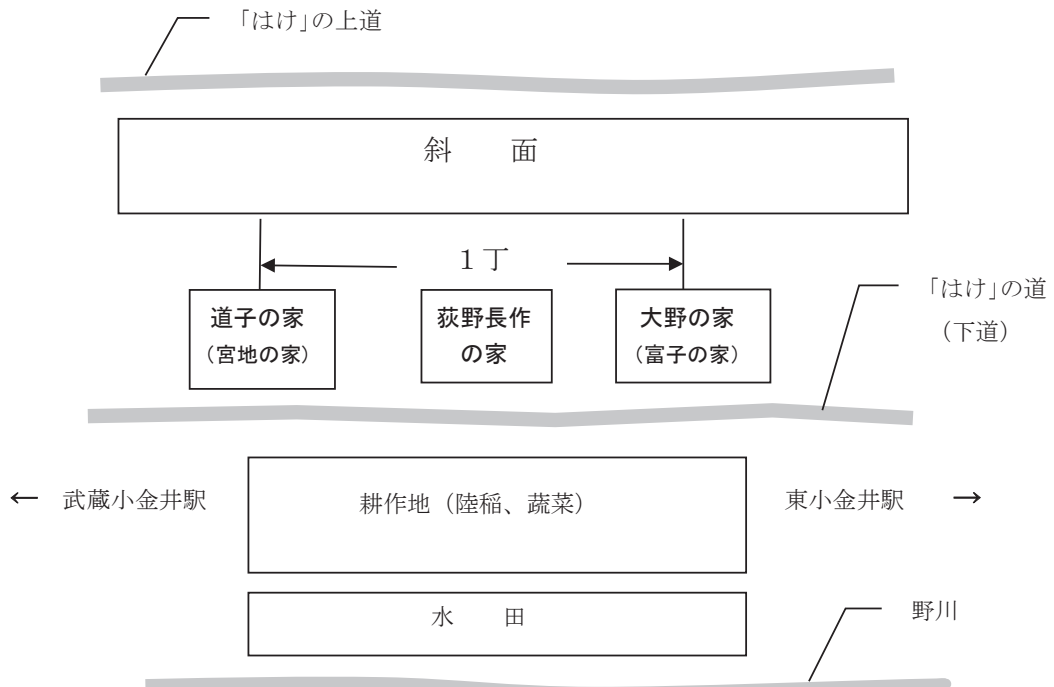
(略) 何かの用事で大野の家へ行くため、

長作の家の前を通る時など、畑に健二が鋤を休めて、じっと見送っていることがある。(p.30)

しかし、次の記述には問題が生じてくる。

彼の足は自然に富子の家を通り越し道子の家へ向かった。「はけ」の木立は十月の明るい空の下にいつものこんもりした姿を沈めていた。(pp.163-164)

これは、勉が道子の家を訪ねるため、武蔵小金井駅で降りて道子の家へ向かう際の描写である。「彼の足は富子の家を通り越し道子の家に向かった」と書かれていることから、道子の家のほうが富子の家(大野の家)より小金井駅から遠いことになり、第1図の位置関係と矛盾してしまう。



第1図 道子、荻野長作、大野の家の位置関係

結局、3軒の位置をいろいろ変えて検討しても、その位置と地理的状况を示す記述に全く矛盾のない位置を見出すことはできなかった。フィクションであるから矛盾があっても当然なのかもしれないが、巷間言われているように、大岡の地理的記述は非常に正確であることを思うと、大岡の勘違いということは考えづらい。

そこで当初の「3軒の家は武蔵小金井駅より東小金井側にある」という仮説を捨て、「小説の舞台は国分寺側に設定されている」のではないかと新たな仮説を立ててみた。

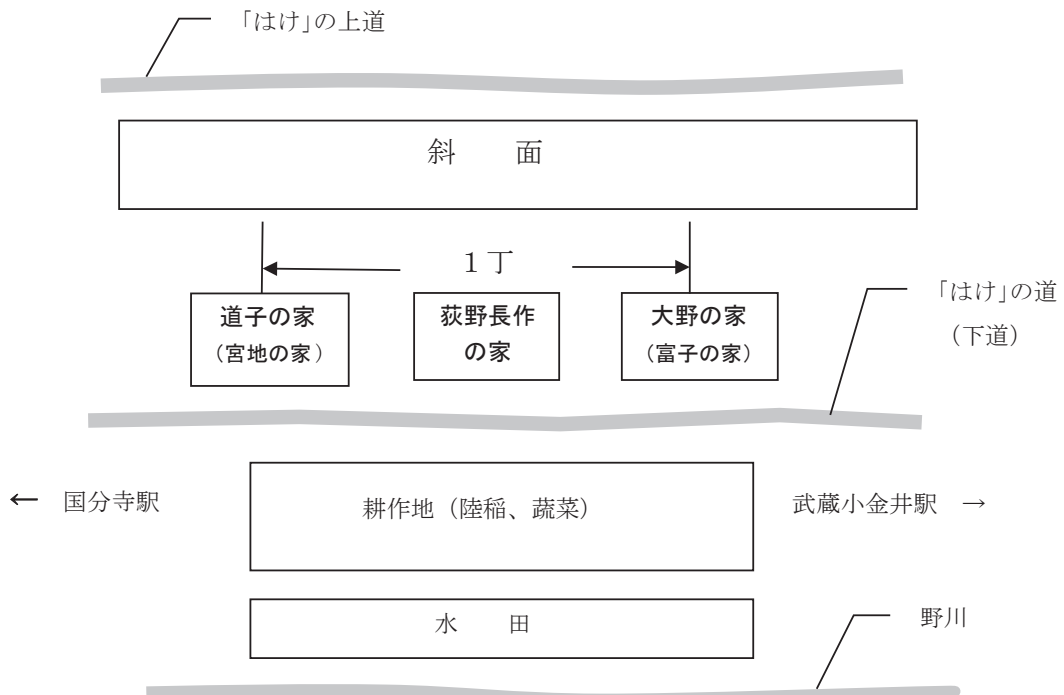
土地の人はなぜそこが「はけ」と呼ばれるかを知らない。「はけ」の荻野長作といえ、この辺の農家に多い荻野姓の中でも、一段と古い家とされているが、人々は単にその長作の家のある高みが「はけ」なのだと思っている。

中央線国分寺駅と小金井駅の間、線路から平坦な畠中の道を二丁南へ行くと、道は突然下りとなる。(p.9)

これは小説の冒頭の文章であるが、この文章中に記されているように、大岡が小説の舞台となる場所を国分寺と武蔵小金井の間に設定した可能性は十分考えられる。この仮説に従い、3軒の家の位置関係を示したものが第2図である。このように、3軒の家が国分寺駅と武蔵小金井駅の間にあると仮定すると、舞台の位置に関する地理的な記述の矛盾は解消される。

また、次の記述からも3軒の家が「国分寺と武蔵小金井の間」に位置することが支持される。

「はけ」の前面で野川は約一間の幅でほとんど橋もない田中の小川であったが、水はや



第2図 道子、荻野長作、大野の家の位置関係 (国分寺駅と武蔵小金井駅の間と仮定した場合)

はり幅不相応に豊富であった。地図によると川は国分寺駅附近の線路の土手の下から発し、「はけ」に続いた斜面からの湧水を集めて来るらしいが、二軒足らずの間にこれだけの水量に達するのは、不自然に思われた。(p.69)

この記述は道子の家の前を流れている野川の水量について勉が感じていることを述べたくだけりである。野川が中央線の線路をくぐっている土手の下から二軒(2km)の地点は、ちょうど国分寺駅と武蔵小金井駅の間地点にあたり、うまく計算が合う。武蔵小金井駅と東小金井駅の間地点に小説の舞台が存在しているとすると、その距離は直線で4km強もあるため、上記の記述と矛盾してしまう。

さらに、以下に示す記述も道子の家が国分寺

駅と武蔵小金井駅の間に位置すること示す根拠となる。

駅の附近に群れるパンパンとその客の間を素速く通り抜け、人気のない横丁を曲ると、古い武蔵野の道が現われた。低い陸稲の揃った間を黒い土が続いていた。(中略)茶木垣に沿い、栗林を抜けて、彼がようやくその畑中の道に倦きたころ、「はけ」の斜面を蔽う喬木の群が目に入るところまで来た。(p.36)

これは、勉が武蔵小金井駅を降り道子の家に行く時の途中の情景を述べたものである。駅の東側の道(小金井街道)を少し南下し、横道に入った後の地点と考えられ、第3図に示すように、ここから左側(東小金井方向)に曲がれば、そこには住宅が続いており、小説の記述にある



第3図 武蔵小金井駅から勉が歩いた足跡(太線で表示)

(昭和17年測量三千分の一地形図『小金井』に加筆)

ような栗林や畑などは一切ない。

一方、小金井街道から右側（国分寺方向）に曲がると、広葉樹林や桑畑などが広がっており、小説の記述と一致している（第3図中の太線を参照）。このことから、勉は人気のない横丁を右に曲がって国分寺駅方向に歩いて行ったことが推測される。

以上のように、小説の舞台となった3軒の家は国分寺駅と武蔵小金井駅の中間にあり、大岡はこの地点を小説の舞台と設定していた可能性が高いことが分かった。

Ⅲ 小説の舞台と「はけ」の家のモデルの検討

つぎに、道子の家（「はけ」の家）と大野の家のモデルとなった家は実在するのであろうか。これを明らかにするために現地調査と当時の地形図による検討を行った。

現地調査は、小説に描かれた道子の家と大野の家の地形的な特徴（詳しくは後述する）を頭に入れ、国分寺から東小金井までの間の道を歩いて実施した。「はけ」の上道（現在の連雀通り）、下道、そして、上道と下道を繋ぐ南北の道を何本も歩いて調べた。上道とは段丘の上側の端に沿っている道であり、下道とは段丘の下側を斜面に沿って続いている道である。

第I章で述べたように、従来、道子の家（「はけ」の家）のモデルは富永邸であると言われることが多い。その一方で、「はけ」の道沿いにある旧中村研一邸（現：中村美術館）を訪れ、庭園を散策し景観を眺めると、道子の家の特徴にとってもよく似ていることに気がつく。大岡は友人の富永邸に寄寓していたことがあり、近くにあった中村邸を時々訪れたと言われているので、道子の家のモデルにする可能性も十分に考えられる。

そこで、作品中に描かれた道子の家（「はけ」の家）の地形的特徴と旧富永邸および中村美術

館のそれとを比較検討した。比較にあたっては、当時の地形図のほかに現在の住宅地図（ゼンリン住宅地図）も用いて検討を行った。

道子の家の第一の特徴は、次の記述に示されているように、敷地が「はけ」の上道と下道にまたがって跨っている点である。また、「はけ」の道沿いには生垣が植えられていた。

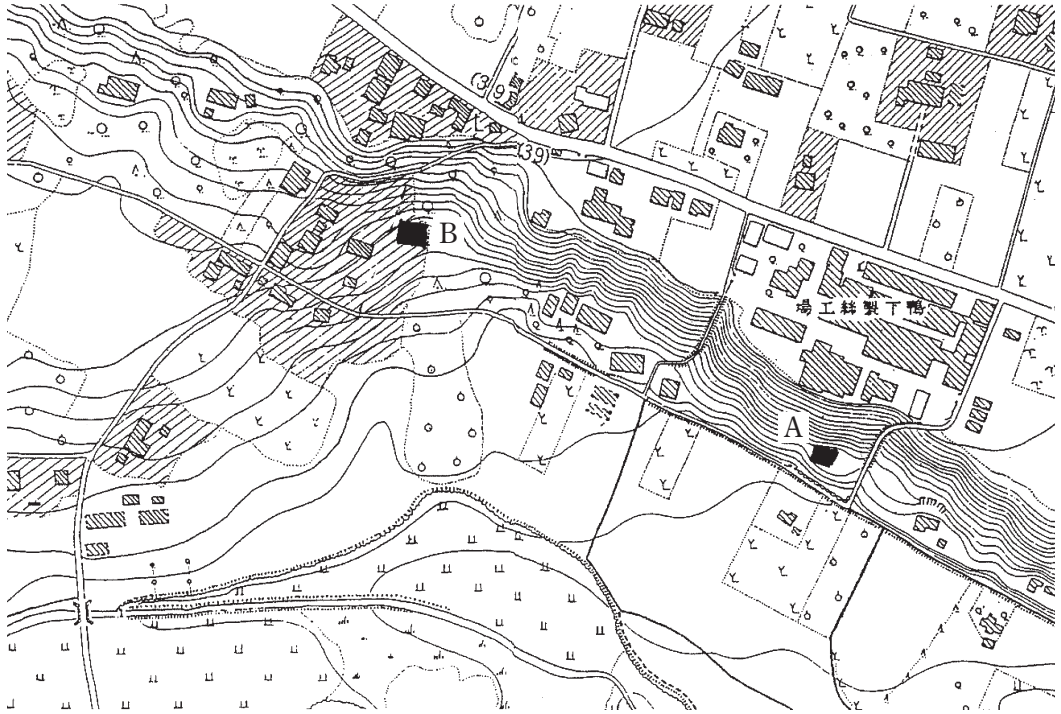
「はけ」の下道から、斜面の上を通る道に跨がる宮地老人の土地は、老人の奇妙なペダンチズムによって、他の家のように門を駅に近い上道に持っていなかった。（p.36）

（略）長作の家で使っている水溜りから西へ十間ばかり、つまりこの窪地の正面を蔽う広さの全部が、今は生垣によって占められ（略）…。（p.11）

そこで、小説が書かれた当時の地形図（第4図）で富永邸付近の様子を確認した。図中に加筆したAの建物が富永次郎邸である。この図から読み取れるように、富永邸（A）の北にはかなり急な斜面があり、さらにその上には工場があって、「はけ」の上道に通じているようには見えない。また、富永邸（A）の前で「はけ」の道の北側は石垣（塙工被覆）になっていて、南側は崖となり、その先は平地となって野川に続いていたことが分かる。「はけ」の道に面した石垣は新たに作り直されているようだが、基本的には現在も当時の様子をよく残している（写真1）。

つまり、どちらの点からも、富永邸は道子の家（「はけ」の家）の第一の条件には合致しないことになる。

つぎに、第4図で中村邸（B）付近の様子を確認すると、敷地の境界は分からないものの、現在の住宅地図によると、中村美術館の敷地は「はけ」の上道と下道にほぼ跨っており、小説の記述と合致する。



第4図 富永邸 (A) と中村邸 (B) の位置

(昭和17年測量三千分の一地形図『小金井』『小金井東部』に加筆)



写真1 旧富永邸付近の現在の景観

ところで、もう一方の「大野の家」について見てみると、次の記述に見られるように、「はけ」の道沿いが「石垣」となっていることが分かる。

道は「はけ」の長作の家の前で少し高ま

り、大野の家の地壇の石垣の下まで、直線でゆるやかにさがって行くが、(以下、略)。(p.58)

さらに、「大野の家」のもう一つの特徴として、斜面の上方に製糸工場があることが分かる。

芝生は最近大野が立てた外灯によって照らされていた。主として蛾を集めるためであるが、一つには上の製糸工場の男女の組が、付近に寄らないためである。(p.101)

すでに見たように(第4図)、富永邸(A)には「はけ」の道沿いに石垣があり、また斜面の上には製糸工場(鴨下製糸工場)が存在している。これは「大野の家」の特徴と一致する。なお、当時の地形図で国分寺近辺から東小金井ま

での「はけ」の道沿いを調べたが、道の片側が石垣となっている家は他には一軒も確認できなかった。つまり、この周辺で「はけ」の道沿いに石垣のある家は、旧富永邸だけということになる。以上の結果から、大野の家のモデルが富永邸であるという可能性は非常に高いものと考えられる。

さて、話を道子の家の特定に戻さねばならない。道子の家の第二の特徴として、次の記述にあるように、その敷地面積は約千坪である。

三十年前湧水を含む窪地一帯の約千坪の地所は、ほとんどただのような値段で東京の官吏宮地信三郎の手に移った。(p.11)。

住宅地図から中村美術館のおおよその敷地面積を計算すると、結果は約千坪であり、これも小説の記述に合致する。一方、富永邸(A)では千坪には満たないかもしれない。

第三の特徴は、次の記述のように、敷地に沿って道が野川の流域まで下りていることである。

「はけ」の窪地は鳥や蝶の通り路であるとともに、人間の道でもあった。農民の作った古い道が片側の赤土を削り、宮地家の敷地に沿って野川の流域まで下りていた。(p.164)

第4図でも明らかなように、「はけ」の上道から南西に分離した道は、中村美術館の敷地の一部に沿って下り、途中「はけ」の下道を横切り野川の流域まで下り野川を渡っている。富永邸(A)の付近にはそのような道はなく、崖下から野川まではほぼ平坦になっている。

第四の特徴は、敷地の中に湧水があることである。

(略) 道行く人はこの垣の中に、かつてこの土地の繁栄の条件であった湧水があろうな

どとは思わない。(p.11)

現在でも美術館内の敷地の斜面と平地の接する部分から何箇所も湧き水が湧き出し流れを作っており、当時の中村邸も現在のように敷地内から湧水が流れ出ていたと推察される(写真2)。

第五の特徴は、流れが下の道を横切るところに、野菜などを洗う小さな水溜りがあることである。

(略) 長作の家で使っている水溜りから西へ十間ばかり、つまりこの窪地の正面を蔽う広さの全部が、今は生垣によって占められ、(以下、略)(p.11)

美術館の庭から出る湧き水は敷地に沿って水路を作り、美術館横の「はけ」の道沿いにある「水溜り」に一時止まってから野川に流れて行く。美術館の東西の敷地幅は約40mほどであり、「水溜り」は一番東側に位置している。小説では、道子の家(宮地の家)の生垣が「水溜り」から西へ10間(約18m)の長さであると述べている。このことから長作の家で使っている「水溜り」と現在の美術館横の「水溜り」とは同位置であり、同一の「水溜り」と考えられる。

第六の特徴は、上道の木戸から入ったところ



写真2 中村美術館(旧中村邸)内にある湧水

は三十坪ばかり平らになっていることである。

木戸から入ったところはまだ三十坪ばかり平らになっていた。かつて宮地老人が長男のために家を予定していたところであるが、(以下、略) (p.37)

美術館の「はけ」の上道側に開いている門(木戸)の近辺に約30坪ほどの平らなスペースがあり、当時からあったものと推察され、これも小説の記述と合致している。

以上見てきたように、道子の家の特徴として記述されている六つの地理的特徴は、どれも中村美術館(旧中村邸)のそれと一致していることが確認できた。このことは道子の家のモデルが旧中村邸であることという可能性が非常に高いことを示している。また、道子の家と大野の家の位置関係を見ると、第2図のとおり道子の家が西側、大野の家が東側に位置し、中村邸と富永邸の位置関係(第4図)に対応していることも分かる。

最後に、国分寺駅と武蔵小金井駅の間地点にあることから、滄浪泉園が道子の家のモデルではないかとの説について確認をしておきたい。結論から言うと、この説には疑問がある。何よりも敷地の規模が大きすぎるからである。すでに述べたように、「はけ」の家は約千坪の敷地面積であるが、滄浪泉園は当初1万坪、現在でも3,600坪の広さである。また、「はけ」の道沿いに石垣のある家(大野の家の条件)も、滄浪泉園の近辺には存在しないことが当時の地形図で確認できる。これらの事実から考えて、滄浪泉園が道子の家のモデルとする説は否定されると考えられる。

IV. おわりに

以上の結果をまとめると次のようになる。

1) 小説の舞台として設定された場所は国分

寺駅と武蔵小金井駅との中間に位置する(第II章)。

2) 道子の家(「はけ」の家)のモデルは旧中村邸(現中村美術館)であり、大野英治の家のモデルは旧富永邸であったと考えられる。ただし、この2軒の家は武蔵小金井駅と東小金井駅の中間にある(第III章)。

上記1)及び2)の結論から小説の舞台として設定された場所(国分寺駅と武蔵小金井駅の中間)と道子の家(「はけ」の家)のモデルがあった場所(武蔵小金井駅と東小金井駅の中間)とは異なることが示唆され、小説の舞台となった場所は、現実には実在しないことになってしまった。

何故、大岡はこのように矛盾した舞台設定をしたのであろうか。おそらくその理由は、作品の舞台を武蔵小金井駅と東小金井駅との間に設定することで、モデルとなった「はけ」の家の住人達に迷惑が及ぶことを避けるためではなかったか、と筆者は考える。大岡と富永次郎は成城高校以来の友人で、大岡は戦後復員後に一家で富永宅に寄寓していたこともあり、富永家のことをよく知っていて、多くの題材を富永家から得ていたことが推察できる。

例えば、まず富永次郎の父と道子の父の経歴が似ていることが挙げられよう。大岡(1958)によれば、富永次郎の父・富永謙治は尾張藩の士族、瓦解後東京に苦学して明治の高級官吏の経歴をたどった後、青梅鉄道の監査役に就任(後に社長)しており、小金井の家は鉄道省事務官の職を退いて後の住居に、予め買っておいだ住居である、という(p.41)。これが小説では、道子の父・宮地新三郎は尾張の五百石取りの旗本の出であり、明治維新で東京に出て鉄道省に職を得た後、静岡県鉄道の重役になり、あらかじめ別荘として建ててあった「はけ」の家に引っ込んだことになっている。

さらに富永家の家族構成についても、富永家と道子の家族構成は良く似ている。上記文献に

よれば、富永謙治には三男二女がおり、長男の太郎は詩人であったが肺結核のため24歳で亡くなり、三男・三郎は作曲家であった。これに対し、宮地新三郎には二男一女の子供があり、長男俊一は24歳で肺結核のため死亡し、次男慶二も作曲家志望であったがやはり24歳で死亡している。このように両家族の間にはいくつかの類似点がある。

むろん大岡(1950)自身が述べているように、『武蔵野夫人』はフィクションで、小説中に描かれる事件や筋書きなどは富永家とは何ら関係はないのだろう。そこで、おそらく旧知の間柄である富永家にあらぬ誤解が生じ、迷惑がかかってはいけないという配慮から、意図的に舞台となる場所を実際の位置から少しずらし、国分寺駅と武蔵小金井駅の中間に設定したのではないだろうか。結果的には、そのことが作品の舞台となった「はけ」の家の特定を難しくし、富永邸説と中村邸説という二つの説を生み出したのではないかと考えられる。

参考文献

青木 昇(1999)：『武蔵野夫人』と野川、『名作と歩く多摩・武蔵野文学散歩』、のんびる舎、pp.44-49。
宇波 彰(1994)：場所への愛、大岡昇平全集3 月報、筑摩書房。
江戸東京たてもの園(2004)：大岡昇平『武蔵野夫人』のくはけの道、『武蔵野文学散歩展—都市のとなりのユートピア』ガイドブック、pp.62-66。
大井田義彰(2004)：恋ヶ窪と「はけ」—大岡昇平「武

蔵野夫人」一、辟雍会制作『武蔵野の自然と歴史「キャンパス周辺散策ガイド」』東京学芸大学出版会、pp.94-98。
大岡昇平(1950)：私の処方箋—『武蔵野夫人』の意図。「群像」昭和25年11月号。
大岡昇平(1958)：富永太郎の手紙、『聲』、創刊號、pp.40-41。
蟹沢聡史(2004)：文学作品の舞台・背景となった地質学-5-『地質ニュース』603、pp.46-57。
小金井市(1979)：わが町小金井—小金井文学散歩〈1〉。「市報こがねい」第478号。
清水靖夫編(2004)：『多摩地形図』。之潮。
榊原和夫(1992)：大岡昇平文学紀行、大岡信、高橋英夫、三好行雄編『群像日本の作家19 大岡昇平』小学館、pp.148-155。
佐々木和子(1993)：『多摩の文学散歩』野川をさかのぼる、けやき出版、pp.72-75。
杉浦芳夫(1992)：『文学の中の地理空間』II 武蔵野幻景、古今書院、p.308。
椿 真智子(2005)：文化環境としてのハケ、東京学芸大学紀要3部門、56、pp.73-84。
寺本 潔(1985)：自叙伝からみた大岡昇平の地理的原風景、地理学報告 Vol.61、pp.67-64。
東京新聞文化部編(1991)：『名作再訪』河出書房新社、p.241。
富永次郎(1958)：『武蔵野夫人』の舞台はボクの家。「旅」1958年12月号、pp.41-43。
長谷川 泉編(1991)：『近代名作のふるさと〈東日本編〉』『国文学解釈と鑑賞』別冊、至文堂、p.319。
前田 愛(1986)：『幻景の街』小学館。
吉田悦造(2005)：『武蔵野夫人』の地理学的一考察、東京学芸大学紀要第3部門 第56集、pp.43-50。